

領域番号	1901	領域略称名	顔・身体学
研究領域名	トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築—多文化をつなぐ顔と身体表現		
研究期間	平成29年度～令和3年度		
領域代表者名 (所属等)	山口 真美 (中央大学・文学部・教授)		
領域代表者 からの報告	<p><u>(1) 研究領域の目的及び意義</u></p> <p>顔と身体表現は常に個人の由来を露出し、かつ顕著に表現し、あるいは個人が何者であるかを読み解くことができる、隠すことのできない媒体である。メディアの進化に付随して、顔の越境化は進む。一方で依然としてアンタッチャブルとされてきた異文化は、意識の外に存在したままの状況である。本研究領域では顔と身体表現の無意識を意識化すること、自身の潜在的な感覚を明らかにすることを、現代社会が直面しつつあるトランスカルチャー状況への解決策の一つとして位置づけたい。</p> <p>トランスカルチャー状況とは「文化」の壁を取り壊す力とそれを作る力が同時に働いているような状況であり、アイデンティティの改変と維持、変容と固定化が並行して生じるような状況である。複数の地域文化や価値観が混在する状態からそれらが交じり合う社会へと転換していく中で、人はどのようにこれまで学習してきた地域性を重んじ、どのように壁を作り、しかしその中でどのように壁を越え新たな社会を構築していくのか、その苦しみや再び適応していくことについて、顔と身体という我々人が持つ原始的な媒体を対象に個人個人の認知や感覚の視点から解明を行いたい。</p> <p>本研究領域では心理学、文化人類学などの実証的なアプローチに加え、顔と装いに関する哲学的な視点も取り入れることで、アカデミックな領域のみのインパクトを越えて、広く社会全体にトランスカルチャーの意義と視点を広げていく。</p> <p><u>(2) 研究の進展状況及び成果の概要</u></p> <p>心理学、文化人類学、哲学の計画班に、人文・社会科学諸分野にまたがる公募班が加入し、総括班が主体となって分野を超えた国際シンポジウムなどのイベントを開催することで有機的連携が強化され、各研究項目とも順調に研究が進展している。</p> <p>研究項目 A01 では、フィールドサイエンスの研究手法を駆使し、顔と身体表現について現場の文脈に即した調査研究を行っている。これまでに、イスラーム圏を含む東南アジア各地の文化ごとの差異と共通性を析出するためのフィールドワークを含む実地調査を実施した。また、人類学と心理学の連携・融合により、表情判断のタブレット実験、表情表出の描画実験を複数のフィールドで実施した。</p> <p>研究項目 B01 では、顔と身体表現の認知メカニズムの解明をおこなっている。個人差の発達とその起源を探るために乳児の脳活動の縦断計測を行い、正面顔認知と横顔認知、顔の印象形成、知覚的狭小化の脳内機構とその発達的变化を明らかにした。国際共同顔・表情データベース、主観印象を操作できる顔構造統計モデルなどの研究基盤の構築も着実に進んでいる。感覚間統合メカニズムに関しては、オランダ人は顔優位で、日本人は顔優位から児童期に声優位にシフトすることを明らかにした。</p> <p>研究項目 C01 では、哲学的観点から顔身体学の理論的な基礎づくりと、実証的な各研究の位置づけについて考察するとともに、異なる社会文化的制度における身体性の変異と変容に注目する「比較現象学」の確立を目指している。活発な国際シンポジウムの開催に加</p>		

	え、「顔身体アプリ」の開発や、「顔身体カフェ」の開催を通して、領域の連携を先導している。
--	--

科学研究費補助金審査部会における所見	A（研究領域の設定目的に照らして、期待どおりの進展が認められる）
	<p>本研究領域は、異なる研究領域で様々な定義で使用されてきた「異文化」、「文化」といった概念を整理し、文化間の交流で生じる文化の共有化と差異化をトランスカルチャー、すなわち「境界設定と越境」という矛盾する二つの面をもつという現象としてとらえ、心理学、文化人類学、哲学の領域をつなげて実証的に検証している。心理学、文化人類学、哲学の学際的融合が図られ、実際の成果として結実し始めている点が新学術領域研究（研究領域提案型）という研究種目にふさわしく、高く評価できる。計画研究間の連携、計画研究と公募研究との連携は良好であり、トップクラスの海外研究者を招いて若手研究者と交流を図るなど若手研究者の育成にも意欲的に取り組んでいる。人の移動・社会の変動が激しい今日の状況にあって、日本国内だけでなく海外を含め、多方面に大きなインパクトを与える可能性を含んだ研究であると考えられる。</p> <p>やや進捗が遅れている研究項目もあるが、基礎データの集積が進めば進展は早まると期待される。今後は、従来の文化比較研究を超えた新たな研究領域として、持続的に発展していくことを目指し、より一層の連携の取り組みに期待したい。</p>